

NEWSLETTER
of
The Japanese Society for Applied Animal Behaviour
No. 18, October

◇ 日本家畜管理学会・応用動物行動学会合同
2009 年度秋季シンポジウムおよび現地検討会報告

シンポジウム特任幹事 河合正人(帯広畜産大学)



与那国馬と

琉球大学での日本畜産学会第 111 回大会に引き続き、2009 年 9 月 30 日(水)から 2 泊 3 日の行程で、日本家畜管理学会・応用動物行動学会合同シンポジウムおよび現地検討会を日本最西端の離島、与那国島において開催した。参加者は 20 名(うち 2 名は 1 泊 2 日)で、内容はシンポジウム「南西諸島における家畜生産システム」、小学生による与那国馬の乗馬実演見学と、牛馬を混牧飼養しているシバ型草地、肉牛および闘牛飼養施設の視察、懇親会などであった。

第 1 日目(9/30)は 10 時に那覇空港を出発し、石垣空港を經由して正午に与那国空港に到着、シンポジウム会場である離島振興総合センターでの昼食後、琉球大学の平川守彦先生に進行をお願いして 4 名の講師の方々にご講演いただいた。まず与那国馬保存会事務局長の前楚和秀氏には「与那国馬の現状について」と題し、保存会設立の経緯から現在の主な活動内容、DNA 鑑定やマイクロチップの埋め込み、凍結精液の保存といった与那国馬の個体識別および個体管理に関する取り組みと今後に向けての課題などについてお話いただいた。続いて元与那国町役場職員の前富里公一氏には「与那国島における畜産と与那国馬」についてお話いただき、戦後の洋種肉牛や馬の導入、役畜としての水牛や現在の和牛導入と与那国馬の飼養管理、飼料調製や草地造成まで、与那国生まれ与那国育ちの前富里氏ならではの、正に与那国島の畜産の歴史について詳しく聞くことができた。後半は NPO ヨナグニウマふれあい広場の佐野恵子場長と久野雅照代表に、それぞれ「与那国馬の活用」、「与那国馬の将来の展望」についてご講演いただいた。お二人とも島の出身ではなく、与那国島のすばらしさ、与那国馬のすばらしさに魅せられて本



シンポジウムの様子

州から移り住んだ方で、ふれあい広場の概要と、与那国馬の保存と活用の両立、とくにヒトとウマとのふれあいの場として「牧場」ではなく「広場」として活動しているスタッフの思いや将来の夢についても語っていただいた。

これまでの本学会のシンポジウムでは研究者からの話題提供が主だったが、今回は皆さん研究者ではなく、与那国の畜産や家畜に携わっている方々の生の現場の声を聞くことができた。事前に各講演 20 分程度でとお願いはしていたが、四者四様の非常に熱い思いを時間内で語りつくすことは到底できず、討論の時間はほとんどとれなかった。しかし、昔から島の畜産を支えてきた人々の考えと、新しく島の家畜に係わっていこうとする人々の考えがそれぞれ違いつつもうまくかみ合うことこそ重要であり、とくに与那国馬という小さな馬をとりまく両者の融合によって、小さな島から大きな動きが始まろうとしていることがひしひしと伝わってきた。

シンポジウム終了後、比川小学校の校庭において青空乗馬チームによる乗馬実演を見学した。シンポジウムでの話題提供にもあったヨナグニウマふれあい広場の活動の一環として、比川小学校では動物介在教育として授業の中に乗馬やウマの管理など、ウマとの「ふれあい」が取り入れられている。9 名の小学生と 6 頭の与那国馬による演技は本当にすばらしく、見知らぬおじさんおばさんの前で初めは少々緊張していたかにみえた子供達も、馬にまたがるととたんに凛々しく、また笑顔にもなって本当に楽しそうだった。演技終盤、久野氏から「皆さんにも是非乗っていただこう」との言葉で、上手に楽しそうにウマに乗る子供達をみていた参加者は、乗馬経験者も未経験者も皆その気になってワクワクし始めたが、その後突然のスコールが……。激しい雨の中、子供達は頑張っウマとの演技を終えたが、我々が与那国馬に乗ることは叶わなかった。少々残念ではあったが、これは「再び島を訪れなさい」との天の声だと思い、近い将来、また与那国島を訪問した際の楽しみとしてとっておきたい。



比川小学校青空乗馬チームと与那国馬の演技

どしゃ降りの雨でずぶ濡れの衣服を着替え、14 頭の与那国馬を飼養管理している与那国馬ゆうゆう広場の二階、島中公民館での懇親会は、前楚氏、ふれあい広場スタッフ、ゆうゆう広場スタッフの皆さんが準備して下さった。カジキの刺身やヤシガニのスープ、与那

国そばなど島独特の料理はどれも本当においしく、伝統舞踊もご披露いただき、また与那国泡盛も入っておおいに盛り上がった。シンポジウムでの討論の時間がなかった分、この懇親会では島の方々との話に花が咲き（後半のカラオケではあまりお見せできない写真も多々ありますが・・・）、予定の2時間の倍、4時間経って日付が替わろうとする直前まで交流を深めることができた。本当に楽しい懇親会で、ご準備いただいた皆さんに心より感謝いたします。



懇親会の様子（お見せしたいが出せない写真がたくさんあります・・・）

第2日目（10/1）の午前中は日本最西端の碑がある西崎灯台に寄った後、北牧場のシバ型草地を視察した。約90haに100頭前後の牛馬が周年混牧飼養されている北牧場には入り口にテキサスゲートが設置されており、和牛を眺める人、与那国馬の後を追って行く人、しゃがみ込んで植生を観察する人、そこかしこに落ちている牛馬の骨と記念撮影する人、馬鼻崎の雄大な景色や岸壁下を泳ぐ海ガメの姿を楽しむ人など、参加者それぞれの興味にあわせて約1時間自由に歩き回った。泡盛の酒造所を見学、原酒などの試飲も楽しんだ後、1泊で帰られるお二人と与那国空



参加者全員で記念撮影



黒毛和牛と与那国馬を周年混牧飼養している北牧場のシバ型草地

港で別れ、アヤミハビル館（世界最大の蛾、ヨナクニサン）にも寄って、東牧場内にある東崎展望台で昼食をとった。テキサスゲートで区切られた約 60ha の東牧場にも与那国馬が周年放牧されており、ここで 1 時間ほど休憩を兼ねて展望台からの景色や放牧馬の様子などを自由に楽しんだ。



東牧場の与那国馬放牧風景とテキサスゲート

午後、大雨男のK会長が帰られた後は、前日の大雨やそれまでの曇り空から一転して快晴となり、2軒の肉牛農家を見学させていただいた。与那国の肉牛農家はどこも和牛の肥育素牛生産で、約 300 日齢で 270~280kg まで育成した後、主に石垣島まで船で輸送し出荷する。最初に訪れた真嘉牧場では約 130 頭の繁殖雌牛を飼養、毎年 100 頭程度の子牛を生産しており、そのうち 10 頭を自家更新にあてている。20ha の採草地はローズグラスおよびギニアグラス主体で、年間 5~7 回の刈り取りでロールベール乾草を 2,500~3,500 個調製していた。人工授精はご自身で行っているが、2~3 回で受精しなかった 1 割程度についてはその後まき牛、分娩は屋外パドック（草地）、また船での輸送の影響を軽減するため出荷 1ヶ月前の 8~9ヶ月齢から石垣で預託していることなどが特徴であった。次に訪問した大嵩牧場では、約 50 頭の繁殖雌牛を飼養、そのうち 30 頭程度を舎飼い、残りは 2ha の草地で放牧している。5ha のジャイアントスターグラス主体採草地では、やはり年間 5~7 回の刈り取りを行っているが、貯蔵庫の許容量の問題から、屋外で貯蔵できるよう一度調製



真嘉牧場の視察



大嵩牧場の視察

したロールベール乾草をラップにしていた。濃厚飼料価格高騰のため 20kg の配合飼料に対して 60kg のフスマを混合して給与すること、また出生後 2 ヶ月齢までは母子一群で飼養するが、それ以降は朝夕 2 回のみ授乳させる以外は別群として飼養管理していることなどが特徴であった。

小休止をはさみ、闘牛場としても利用されるイベント広場と闘牛飼養施設を見学させていただいた。与那国では毎年 2~3 回闘牛大会が開催されており、約 1 ヶ月後にも大会をひかえているために闘牛の試合はみることができなかつたが、肉牛生産を行いながら闘牛を 5 頭飼養している入福浜賢氏に色々な楽しいお話を聞くことができた。飼料の種類や給与方法、とりわけ大会前の特別な調製メニューやトレーニングの方法などについて



入福浜氏の闘牛とその飼養施設

では、闘牛を飼養されている方それぞれの経験に基づいた考えがあり「極秘」なのだそうだが、大会で勝利した後の酒宴で泡盛が入ると皆さん饒舌になって話してしまうとのこと。このようなお祭りも、島の文化とともに畜産を支えている重要な要素であり、是非次回は闘牛大会の日程に合わせて島を訪問したいものである。

以上でシンポジウムと現地検討会の企画はほぼ終了し、夜は今回の与那国訪問のご準備で大変お世話になった平川先生を囲んでの打ち上げ、明けて 3 日目 (10/2) は町内の散策、港での釣り、ナンタ浜で泳ぐなど、それぞれ自由に与那国最後の朝を過ごし、午後には那覇空港に戻った。不備不足など、参加者の皆様にはご迷惑をおかけした部分も多々あるかと思いますが、特認幹事を仰せつかった私自身も非常に充実した 2 泊 3 日の行程を楽しむことができました。ご参加いただいた方々にお礼申し上げます。

最後に、今回のシンポジウムおよび現地検討会開催にあたり、企画段階からご協力いただいた琉球大学の川本康博先生、全面的なご準備に加え与那国にご同行いただいた平川守彦先生、ご講演に加えて視察先の調整などでもご尽力いただいた与那国馬保存会の前楚和秀事務局長に深謝致します。また、ヨナグニウマふれあい広場の久野代表、佐野場長をはじめスタッフの方々、前富里氏、見学先の方々、比川小学校青空乗馬チームの子供達、その他たくさんの方々にご大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。



◇日本家畜管理学会・応用動物行動学会合同シンポジウム in 与那国 参加報告

小木野瑞奈
(北里大学獣医畜産学部
博士後期課程3年)



9月30日から10月2日までの3日間、与那国島で開催された日本家畜管理学会・応用動物行動学会 合同シンポジウムに参加した。

那覇空港からさらに南下し、石垣空港で飛行機を乗り換え、与那国島に降り立った。台風の影響が危ぶまれていたが晴れ間が見え、天候は9月末にして私の住む青森では経験できない真夏の暑さだった。与那国空港からはバスでシンポジウム会場まで行った。3日間、移動は常にバスで行ったが、バスの中では添乗員の方が与那国島の案内や、三線まで披露してくれた。

会場に着いてお昼を食べるとシンポジウムが始まった。与那国馬保存会の前楚さんの与那国馬の現状についての話、前富里さんの与那国島の畜産についての話、ヨナグニウマふれあい広場の佐野さん、久野さんの広場での活動や広場ができるまでの話、どの方の話も興味深く、牛の研究をしている私にも親しみやすかった。馬の専門的なことはわからないが、4方とも与那国馬に対する思い入れが非常に強く、熱心に活動に取り組んでいることがすごく伝わってきた。このシンポジウムを通じて馬の研究者と、実際に活動している人のつながりが深まり、今後さらに在来馬の保存や、在来馬を使った教育が発展していくのではないかと感じた。

シンポジウムの後、島の小学校での乗馬教育を見学した。初めて見る与那国馬は非常に小柄で四肢の細い馬であった。小学生の子ども達が乗馬しているところを見せてもらった。最初インストラクターが乗って演技をし（あんなに小柄な馬なのに大人でも普通に乗れるんだ！と思った）、次に子ども達が島の運動会で披露したという演技をしてくれた。大変上手に乗っていた。また、馬が小柄であるため非常に乗りやすそうに見えた。私も乗馬を習って（5級）ライセンスを取得したことがあり、乗ってみたいと思った。しかし、見学の途中でスクールに見舞われ、施設に避難。雨が降らなければ乗ってみたかったのに、と会員の先生方も残念そうだった。乗馬演技見学後には懇親会が開かれ、4方とゆうゆう広場の職員の方が与那国の料理でもてなして下さった。特にヤシガニの味噌汁と、カジキマグロの刺身が美味しかった。私は松浦先生の隣に座っていたが、松浦先生と佐野さん、久野さんが馬の研究について熱く議論しているのを聞いていた。久野さんが、経験上で分かっていることを科学的に証明してくれと仰っているのが印象的だった。私達研究している者の役割は、まさにそれだと感じた。オリオンビールを沢山飲み、良い心地で一日目を終えた。与那国馬について熱く語り、最高の与那国料理でもてなして下さった関係者の

方々に感謝したい。

二日目、ホテルを出発し日本最西端の地、西崎灯台へ。111kmしか離れていない台湾は雲に隠れて見えそうで見えなかった。次に放牧草地である北牧場を見学した。崖の上のようところで牛と馬が混牧されていた。牧草のような草は無いに等しかった。海からの潮風による塩害で草も育たないのだろう。牛達はしょうがなく地面に這って生える植物（名前はわからない）を食べていた。非常に痩せていて、私の肉をあげたいくらいだった。次に泡盛の酒造所を見学した。酒造所自体はこぢんまりとしていたが、古酒を造るための甕は見たことのない大きさだった。アルコール度数70度くらいの原酒を飲ませていただいて、口から火が出そうになった。これで消毒されて、インフルエンザにもかからないだろうと思った。

一度空港に立ち寄り、鎌田前会長、近藤会長をお見送りして、次に東牧場（シバ草地）へ向かった。ここも断崖絶壁のところに馬が放牧されており、こんなところにも馬が住めるのかと驚いた。牛は見られなかったが、ここに住む馬達は近づいても逃げず触ることができた。この日は非常に天気が良く、気温も高かったため、馬達も日陰や水の出る場所を探して避難していた。私も何年かぶりに日焼けをした。断崖絶壁から広がる青い海の絶景を見ながら昼食をとり、次に真嘉牧場という舎飼いの牧場へ行った。130頭ほど黒毛和種を飼っていて、粗飼料はすべて自給だと仰っていた。一番の問題点はやはり台風による被害だそうで、牛舎は台風に耐えられる頑丈な資材でつくられていた。牧草にやる肥料もスコールなどにより流れてしまうらしい。出荷時には一度石垣島へ1か月前に輸送してから本島なりに出荷するそうで、その辺にもコストがかかるのだろうと思った。牧草は年に7回も刈るというのを聞いて驚いた。次に大嵩牧場という、こちらも舎飼いの牧場を見学した。約50頭の規模で、こちらも乾草は自給で、これに加えてふすまをあげていた。問題点は下痢の発生で、これは連動スタンションを取り入れてから大分改善されたようだ。どちらの牧場の牛達も人間と同じく非常に暑そうにしていた。しかし舎飼いといっても開放的な牛舎で風通しが良く、空調設備は無かった。確かに与那国島は風がかなりある気がした。次に闘牛を飼っている農家へ見学に行った。闘牛というとスペインの闘牛士のイメージが強いが、こちらでは牛同士の戦いである。与那国島では年二回、沖縄本島では毎週試合が行われているらしい。闘牛の見た目は威圧感たっぷりであったが、手を伸ばしてみると舐めてきたりして、意外と気質は穏やかだと思った。しかし、試合前には減量して牛を興奮させると言っておられた。丸太のようなものをぶら下げてサンドバック代わりにトレーニングしており、それを闘牛が頭付く姿は少し怖かった。二日目はかなりタイトな見学行程で、濃密な時間を過ごした。

与那国島で見学したことを改めて文字に起こすと、色々なものを見たと思う。在来馬での教育、南方の島での牛や馬の放牧、舎飼い風景を初めて見学することができた。とても貴重な体験だった。このシンポジウムの幹事を務めてくださった帯広畜産大学の河合正人先生、並びに与那国島を案内してくださった琉球大学の川本康博先生、平川守彦先生に感

謝したい。

◇ 日本家畜管理学会・応用動物行動学会 合同シンポジウム in 与那国島 参加報告

高橋良平（帯広畜産大学大学院 修士1年）



今回のシンポジウムは沖縄県与那国島にある与那国町離島振興総合センターで行われました。琉球大学で行われた日本畜産学会の翌日、那覇から飛行機を乗り継ぎ日本の最西端である与那国島へ向かいました。与那国島は、南北4km、東西12kmととても小さく、およそ1700人の人々が生活しています。一年中風が強く、私たちが降り立った時も強風で天気もぐずついています。

今回のシンポジウムの内容ですが、与那国島における畜産について前楚和秀さん、前富里公一さん、佐野恵子さん、久野雅照さんの4人の方にご講演頂きました。与那国馬保存会の前楚さんの講演は、「与那国馬の現状」についてであり、現在の頭数から繁殖状況、また保存会の活動など与那国馬の「今」について知ることができました。島では与那国馬を自然放牧に近い形で飼っており、なかなか頭数を増やすのが難しいとのことでした。しかし2009年には4頭が出荷され、また島のイベントに町民や観光客とのふれあいのために参加しているという話を聞き、今後与那国馬がどうなるかととても楽しみです。

前富里さんの講演は、「与那国島における畜産と与那国馬」についてであり、与那国島の畜産の歴史と与那国馬との関係についてとても詳しく教えて頂きました。与那国島の畜産は沖縄本島や近くの島だけでなく、中国や台湾、韓国、アメリカなどさまざまな国の影響を受けてきましたが、いまだ与那国馬は在来馬のなかでも純度が高いといわれているはとても興味深いことでした。

ヨナグニウマふれあい広場の場長である佐野さんには、「与那国馬の活用」について話して頂きました。島の小学校で行われている乗馬はまさに与那国島だからできることであると思い、子供たちが成長する上で非常によい経験になると思いました。また普通の乗馬は少し怖いという人でも小柄で温厚な与那国馬なら楽しめるのではないのでしょうか。ヨナグニウマふれあい広場代表の久野さんには「与那国馬の将来の展望」についてご講演頂きました。与那国馬に魅せられて神奈川から移り住んだという久野さんの話はとても熱く、与那国馬への愛を感じました。動物介護や乗馬としてだけでなく、社会に馬が根付きいずれば与那国馬を世界に、という夢はとても素敵だと思いました。

講演の後、近くの小学生たちによる与那国馬の演技を見ましたが、まだ低学年と思われる子が与那国馬を自在に扱っているのには驚き、また感動しました。その後突然のスコールともいべき大雨が降ってきて、与那国馬へ乗るチャンスが潰れ、先生方は非常に残念

そうでしたが、ひどい腰痛で苦しんでいた私は内心ほっとしました。

夜には懇親会を開いて頂き、ヤシガニのスープや新鮮な刺身、クバ餅（クバの葉で包んだ黒糖味の餅）など与那国島ならではのおいしい食べ物や泡盛（とてもきつかった・・・）をふるまって頂きました。シンポジウムでは講演後の討論の時間があまりありませんでしたが、懇親会でいろいろな方と話す機会がありとても楽しめました。また先生方の熱唱や前富里さんの唄、島の人たちによる伝統芸能(棒踊り)などもあり時間が過ぎるのがとても早く感じました。

次の日はまず与那国島の最西端、つまり日本の最西端でもある西崎灯台に行きました。180度青い海と空をバックに丘の上に立つ真っ白な灯台はとてもきれいでした。日本最西端を示す碑もあり海の向こうに台湾が見えることもあるとのことでしたが、残念ながら見ることはできませんでした。次に与那国馬や牛が放牧されている北牧場に向かいました。海を臨む断崖上に草地が広がっており馬や牛がうろうろしていましたが、草高は非常に短く馬はまだしも牛はちゃんと食べられているのか疑問でした。驚くことに牧場の入り口には柵がなく、「テキサスゲート」と呼ばれる20cmほどの溝が5本ほどあるだけでしたが、この上は馬や牛だけでなく犬や猫も通れないそうです。

その後すぐ近くにある舞富名という泡盛を造っている入波平酒造さんにお邪魔し、泡盛の製造現場を見せて頂きました。中はすごい熱気でとても熱く、泡盛を蒸留している樽の近くは蒸気で前が見えないほどでした。まだ度数が高いままの泡盛の試飲に先生方は喜んで参加されており（60～70度）、お土産を楽しそうに購入されていました。少し時間が余ったため、急遽世界最大の蛾であるヨナグニサン（アヤミハビル）について知ることができるアヤミハビル館に行くことになりました。与那国島はさまざまな蝶が数多く生息し、東南アジアなどからも風に乗って飛んでくることがあるそうです。館内には与那国島特有の昆虫標本が多数展示されており、その多彩さに驚きました。さらに生きたアヤミハビルが飼育されており、成虫の寿命は1週間ほどしかなく、見られたのはとても幸運でした。

昼飯と休憩のために島の東端にある東埼（あがりざき）に行き、そこでしばらくのんびりしました。ここでも与那国馬が放牧されており、短い草をもしやもしやと食べていました。日差しが暑いのか、多くは草地に建てられたトイレの影でじっとしていました。また少し離れたところに風力発電用の風車がぐるぐると回っており、風の強さを実感しました。

その後島の肉牛農家さんにお邪魔しました。1軒目は真嘉牧場さんで、繁殖用に130頭ほど飼育し、子牛を年80頭ほど出荷されており、個人経営では比較的規模が大きいとのことでした。ギニアグラスなどの牧草を刈り取り、乾草として給与して、牛が食べている間に自分で種付けをされているそうです。2軒目は大嵩牧場さんで、家族二人で経営しており33頭を舎飼い、21頭を放牧させているとのことでした。放牧地は2haで、20頭を維持できないので刈り取った乾草やJAから購入したロール乾草も給与しているそうです。また生まれてから2カ月以降は常に母と子と一緒にしているわけではなく、朝夕2回授乳させておりこの方が子牛の食い付きがいいとのことでした。どちらの農家さんでも台風で屋根が

飛ばされる等の被害を受けたり、出荷は石垣島まで連れていかなければならないが船での輸送で15~20kg 痩せてしまうといった離島特有の問題があったり、島での畜産の難しさを感じました。

2日目の最後は闘牛を見せていただく予定でしたが、大会が近く闘牛はさせられないので牛だけ見せてもらいました。闘牛用の牛はとて大きく体重は1tになるのもいるらしく、いつも扱っているホルスタインとはまるで違っていました。角も太く、顔の前に吊るされた木のサンドバック（のようなもの）をゴスゴス突いており少し恐怖を感じました。闘牛は趣味でやっている方が多いらしく、年数回ある大会で勝つととても高い値で売れるとのことでした。闘牛を見られなかったのは非常に残念で、また沖縄方面に来る機会が今度はぜひ見てみたいと思いました。

こうして2日目は与那国島をほぼ一周し、普段お目にかかれなかったものをいろいろ見ることができ、与那国島での3日間はあっという間に過ぎていきました(3日目はほぼ移動だけだったので)。私は普段あまり馬と関わることはありませんでしたが、日本の最西端でのびのびと暮らす与那国馬を見られたことはとても良い経験になりました。また今回のシンポジウムにあたって、貴重な経験をさせて頂いた与那国島の皆さん、とても興味深い話をしてくださった先生方に感謝いたします。

◇ 編集後記

気温も徐々に下がってきて、山の紅葉も色づき始めておりますが、皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。今回のニューステター No.18 では、沖縄・与那国で開催されました秋期シンポジウムの報告を中心にお届けいたしました。次号は1月ごろ春季発表会などの開催情報を中心にご案内させていただきたいと考えています。気温の低下や大気の乾燥とともに、ひと頃落ち着いたと見られていた新型インフルエンザが、再び猛威を振るいだしているようです。これから年末・年度末にかけて、様々な研究会・シンポジウム等が各地で開催されることかと思いますが、皆様お体には十分お気をつけください。

(ニューステター担当：茨城大 小針大助; kohari@mx.ibaraki.ac.jp)